

抗精子抗体保有患者における精子不動化値の違いが臨床成績に及ぼす影響

和泉 広樹、関藤 孝昭、赤松 芳恵、佐藤 学、橋本 周、岩端 秀之、前沢 忠志、
姫野 隆雄、井上 朋子、伊藤 啓二郎、中岡 義晴、森本 義晴
医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

目的

抗精子抗体には精子の卵管通過、透明帯、卵細胞膜との結合、運動性の阻害などの作用がある。精子不動化試験 (SIT) において精子不動化値 (SIV) が陽性 (2.00 以上) の場合、自然妊娠や人工授精による妊娠成立の可能性は低い。一方で ICSI では精子が抗体に曝される事が無く、有効な治療法の一つとして挙げられるが、SIV 陽性の抗体価が臨床成績にどのような影響を与えるかは明らかでない。今回、SIT 陽性患者において ICSI 後の臨床成績に SIV の値が与える影響を調べた。

方法

平成 15 年 12 月～平成 26 年 3 月に SIT を当院で行った 8747 件中、62 症例 (0.7%) が SIV 陽性を示した。そのうち、ICSI を実施した 49 症例、262 周期を対象とした。SIV が 2.00～9.99 を低値群 (30 症例)、10.00 以上を高値群 (19 症例) とし、正常受精率、移植周期あたりの臨床的妊娠・出産率、総精子濃度 ($\times 10^6/\text{ml}$)、運動率の比較を行った。

結果

低値群における正常受精、臨床的妊娠、出産率、総精子濃度、運動率はそれぞれ 81.3% (421/518)、40% (38/95)、23.2% (22/95)、 $114.3 \times 10^6/\text{ml}$ 、58.5%であった。高値群では 84.1% (169/201)、50% (17/34)、23.5% (8/34)、 $141.6 \times 10^6/\text{ml}$ 、61.1%であり、両群間において正常受精、臨床的妊娠、出産率に差は見られなかった。また、総精子濃度は高値群で有意に高かった ($p < 0.05$) が、運動率に差は見られなかった。

考察

SIT 陽性患者において、SIV の値は ICSI 後の受精とその後の発育に影響を及ぼさない事が示唆された。また今回、抗精子抗体の抗体価を上昇させる要因として、精子の量が影響していることが示唆された。